

福島で
多くの方々とともに
楽しいイベントを開催したい！

宮内 理



2011年の東日本大震災から約5年の歳月が経とうとしています。

私は埼玉県に生まれ、戦後最も大きな災害も新聞やブラウン管を通して情報を知る程度の傍観者でしかありませんでした。

全く緑のない地に住む自分にできることがわからず、ただただ過ごすばかりありませんでした。しかし、どこかで「なにかできることがあるのでは。せつかくなれば、自分の得意とする美術の分野で」そんな気持ちを持って生活してきたことも確かです。

私が予備校、大学、大学院と美術を学び、卒業後も美術と向き合ってきた理由の1つとして、作品との出会いによって自分の考えが180度変わるような衝撃を受けたり、その奥にある作家の持つ思想や、目に見えない深い感情表現を知ったり、アートとのかかわり合いの中で、現実世界を超えたたくさんものの見方を発見することができ、その経験から、美術には人の心を豊かにする素晴らしい要素や可能性が秘められていると信じ、自らも制作活動を行ってきました。しかし一方で、アートの世界が一般に、「難しい」「わかり辛い」と捉えられている節があることも感じてきました。美術館やギャラリーに足を運ぶ人はごく一部の人間に限られており、もっと一般に開けた公共施設で作品発表ができないかと、あえて動物園や博物館、学校等で作品制作・発表を行ってきた経験もあります。また、日本の次世代の担い手たちである子どもたちに美術の魅力を感じてもらいたいと、教育的視点を持って、こども向けワークショップや絵画指導も数多く行ってきました。そんな中、美術によって、私の経験の中で最も地域貢献を叶えさせてくれた活動がありました。それが、2015年9月、長野県南木曾町という県内で最も人口が少ない地域で行われた「南木曾アーティスト・イン・レジデンス」（以下NAIRと記す）です。今回私が自ら福島県でアートイベントを企画したいと思わせるきっかけをくれたこのNAIRは、20代から30代の全く南木曾町とは縁のない若手作家4人の活動でした。アーティストそれぞれの視点で、自分たちが得意とする芸術の分野で町や人のために何ができるかを真剣に考え、県外から来た人間ならではの感覚で、その土地の文化や歴史や空気を新鮮に感じ、18年前に廃校になった旧妻籠小学校を拠点に作品制作・発表を行なう。作り手の

立場からは、同じ立場の仲間と苦労や喜びを分かち合いながら制作できたことが、日常にはない貴重な経験となりました。さらにそれが、町おこしのため、地域の人のためのいちサポーターとして役割を担えたことが最も幸せな事でした。実際に、土地の文化や古い小学校の建物の力に魅了され、素直にインスピレーションが湧き、それぞれがそこでしか作れない作品を生み出すことができました。そしてこのアート活動は、町の地域おこしという大きな役割も担っていました。どうぞぜひ町の人たちに自分たちの活動を理解してもらえらるだろう。意見を打ち合い、子どもたちを対象としたワークショップ、制作風景を公開するオープンスタジオなど、町の方々と交流をはかる機会をふんだんに設けました。その間、老若男女、多くの方と積極的に話をし、理解の輪が少しずつ大きくなっていきました。私が活動の中で最も強く感じたことは、地域の人たちはそもそもアート自体に大きな期待や意味合いを持っていないということでした。私たちの真剣な気持ちが少しずつ伝播した結果、皆がアート空間を楽しんでくれ、徐々に興味を持ってくれました。町の人たちからは「若い子どもたちが私たちの土地に来て、なにか一生懸命やっている。じゃあ、応援してあげよう」そんな後押しを日に日に強く感じられるようになっていきました。その時、理解されにくいことをするからには広く理解してもらうための環境作りが必要だと身を持って感じました。僻地とも言える山中の廃校の校舎に、最終日2日間で行われた展覧会で来場者数は約450名を超え、普段ほとんど活用されていなかった旧妻籠小学校に、18年ぶりに子どもたちの笑い声や足音が響きました。卒業生だったという大人たちも集まり、心から懐かしんでくれました。このイベントは、最初から最後まで人と人とのかかわり合いの中での行われた活動でした。滞在期間中、町の方のご厚意でホームステイをさせていただいたり、多くの協力を得ることができ、温かい支えの中で安心して制作に打ち込むことができました。外から町を見た人間だからわかる魅力を町の人たちに伝えたい。来場者にアンケートを実施すると、県外の方々からは、「この土地や建物の魅力を強く感じた」県内の方々からは、「この土地の良さを再認識できた」というご意見を多くいただきました。NAIRにより地域の活性化、若手アーティストの支援という2つの役割を果たせたことで、このようなAIRを核としたアートイベントの意義を強く感じる事ができました。そして、地域を盛り上げ、笑いが溢れるようなイベントを、今までアクションできなかった福島の地で企画したい。県外の人間だからこそできることもあるのではないかと。そんな前向きな気持ちへと導いてくれました。もっともっとアートによって地域に笑いや喜びを生み出したい。わかり辛いアートのハードルを下げ、観んでもらえるよう開口を広げたい。そして楽しいだけでなく、参加者全員に福島や郡山という地について考えたい、文化に触れる機会を作り出したい。さらには言えば、日本の過去・現在・未来について考えていだけるような意義のあるイベントにしたい。そんな気持ちが今の私の原動力となっています。